

QOL

Quality Of Life

QOL サポーター 新潟

vol. **57**



新潟医療福祉大学 広報誌 QOL サポーター 新潟
Vol.57 2021年12月6日発行



新潟市北区島見町1398番地 TEL: 025-12571445(代)
https://www.nuhw.ac.jp
【入試事務室】TEL: 025-25714459 E-mail: nyuusi@nuhw.ac.jp



02 **【特集1】** 開学20周年特集 第3弾 開学から現在までの歩み

04 **【特集2】** 「連携総合ゼミ」開催報告

06 **【くらしサイエンス】** こんな時どうする!? 応急手当を学ぼう

08 **【健康栄養学科が教える!】** 自宅でカンタン栄養満点レシピ

09 「新潟医療福祉学会学術集会」開催報告 10 キャンパスニュース

INFORMATION

「英語を「学び」「使う」保育園」 インターナショナルこども園

本学では、2016年度より開始された内閣府「企業主導型保育事業」による保育施設を、2018年4月に開設しました。本学教職員、学生、地域の方を対象に以下の概要にて園児を募集しておりますので、関心のある方はお問い合わせください。

特色

① **毎日英語にふれあう環境**
1日2回のレッスンや、外国人スタッフから英語表現を自然に習得！幼い頃から生の英語に親しむことにより、「英語耳」が育ちます。

② 少人数保育

保育士や講師がきめ細かく指導できる、少人数制の安心感。アットホームな雰囲気の中、毎日楽しく過ごすことができます。

③ 手作りランチ

昼食は、プロの栄養士が手作りします。栄養バランスの取れた理想的な給食で、離乳食や食物アレルギー対応の食事の提供もOK。

④ 大学の先生による支援

大学附属のこども園だから、健康やスポーツ、医療看護、栄養等、各分野に精通した先生方が子ども達の発育をサポート！

定員
19名(地域枠9名を含む)

入園児募集

2022年度の入園申込み受付中

【0歳児(生後6ヵ月)～5歳児】
※空き定員がある場合は1歳児～5歳児の「2時預かり」を行います。

保育時間

7時30分～19時00分

休園日

原則として、土曜、日曜、祝日、お盆、年末年始(12/29～1/3)。新潟医療福祉大学教職員年間予定表で定める休日に準じております。

入園に関するお問い合わせ先

新潟医療福祉大学附属
インターナショナルこども園(園長/栗田)
TEL: 025-25714004

利用者の声



インターナショナルこども園は、少人数制で個別指導が充実しています。自然と英語に触れながら、先生方は一人ひとりの特徴を理解して長所を伸ばす指導をしてくださるので、こどもが伸び伸び成長しているのを実感しています。(臨床技術学科 高橋 良光 先生)

新潟医療福祉大学 創立20周年記念サイト



2001年に開学した新潟医療福祉大学は、2021年6月17日に創立20周年を迎えました。その周年を記念し、「創立20周年記念サイト」を制作しました。
本サイトでは、「第1期生×第20期生」による特別クロストークや、本学教員による健康に関する有益な情報提供を行う「NUHW健康ラジオ617」など、さまざまなコンテンツを、ご覧いただけます。
また、「OB・OGが振り返る 新潟医療福祉大学の20年」と題し、卒業生の皆さまが学生時代の思い出を投稿してシェアし、学生時代を振り返る事のできるコンテンツをご用意しております。ぜひこの機会に、当時は振り返っていただき、写真とメッセージをご投稿いただけたいと思います。

特集1

新潟医療福祉大学

20年の歩み

Niigata University of Health and Welfare
20 years history

2001年開学当初

2021年現在

優れたQOLサポーターの育成

Quality of Life Supporters

学部・学科数

2学部5学科



6学部13学科



学生数

321人



4,548人



大学の科学研究費

1件 70万円



106件
1億9,851万円



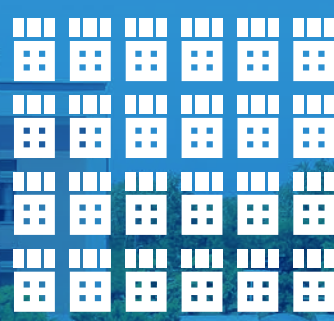
※文部科学省 2020年12月25日発表

キャンパス内の棟数

8棟



24棟



学生食堂

1カ所



4カ所



Niigata University of Health and Welfare 2021

20th Anniversary

開学当時から在籍の 教員メッセージ

Message from the faculty

理学療法学科
相馬 俊雄 教授



言語聴覚学科
今村 徹 教授



健康栄養学科
遠藤 和男 教授



健康栄養学科
岩森 大 講師



社会福祉学科
丸田 秋男 教授



社会福祉学科
五十嵐 紀子 准教授



理学療法学科
大西 秀明 教授



作業療法学科
能登 真一 教授



健康栄養学科
斎藤 トシ子 教授



健康栄養学科
山崎 貴子 准教授



健康スポーツ学科
西原 康行 教授



社会福祉学科
横山 豊治 教授



医療情報管理学科
寺島 和浩 准教授



時代の変化や社会の情勢に対して、常に先を見据えて邁進してきた20年間だったように思います。今では、名実ともに日本一の医療福祉系の大学となり、他大学から目標やモデルとされるようになりました。社会に必要とされる専門職を目指す学生にとって、質の高い人材育成が重要となります。そのためには、他大学にない唯一のことを目指すと同時に、基本的かつ根本的な志・学問・技術の研鑽を忘れてはならないと感じています。

この20年間、学生数や学科数、施設・設備など、あらゆる面で変化がありました。その変化があったからこそ、本学は現在こうしてアクティブな姿を保っています。今後も時代に適応し、必要な変化を遂げながら「生き延びていく」大学であり、教員の理想への熱意と学生の前向きなエネルギーが大切であると感じています。

開学時は300名程度だった学生数が、今や総学生数約4,500人を超える医療系の総合大学へと変化していきました。初代学長の「QOLサポーターの育成」という概念は、これからも保持していくべきであると考えています。今後大学がさらに成長し、様々な学科が増えたとしても、「困っているクライアントのQOLを支援する」ということは、建学のコンセプトであると信じています。

本学は、多様化するQOLニーズに対応できる人材育成環境が、非常に充実しています。学生に対し、入学から卒業まできめ細かくサポートしていく支援体制は、これまでもこれからも変わりません。超高齢社会に突入した世の中において、必要不可欠な保健、医療、福祉、スポーツの専門職を輩出し続け、「一人一人の生き方(QOL)を大切にする」という理念にもつながっていくと思います。

本学は、この20年で6学部13学科の医療系総合大学に発展しました。その大きな要因は、学生・教職員の一人ひとりが新潟医療福祉大学の一員として愛着と誇りを持ってコミュニティを形成したことにあると思います。「優れたQOLサポーターを育成する」という建学の精神は、人口減少社会や超高齢社会の到来など社会環境の変化を超えて、人々や社会が必要とする大学として持続的に発展し続けるパワーとエネルギーを生み出すものと確信しています。

この20年で大学の認知度が格段に上がりました。今は外部の方から「新潟医療福祉大学といえば…」と、在学生や卒業生などの活躍ぶりに注目が、話題を振っていただけます。毎年多くの卒業生を輩出してきたことで、地域で活躍する卒業生とともに本学が掲げるQOLの向上という理念を、地域全体で実現する力が今後も益々高まっていくことを期待しています。

18歳人口が右肩下がり推移する中、本学は開学時の2学部5学科から、現在の6学部13学科と右肩上がり拡大してきました。学生数や教職員の距離が近いので、開学以来良い関係が築けているように思います。今後本学が成長していく中で、初心を忘れず、規模が大きくなっても、高等教育の役割・人間教育をしっかりと果たせるよう発展していかなければいけないと考えています。

この20年間で、建物や敷地は言うまでもなく、学生さんや教職員といった人員の規模が圧倒的に大きくなりました。学生さんと教職員の距離が近いので、開学以来良い関係が築けているように思います。今後本学が成長していく中で、初心を忘れず、規模が大きくなっても、高等教育の役割・人間教育をしっかりと果たせるよう発展していかなければいけないと考えています。

開学当初は、5学科300名前後の定員でスタートしましたが、この20年間で学科は13学科、学生数は約4,500人と目を見張る勢いで変化してきました。全教職員も大学の使命を果たすべく、日々、努力を重ね、研究、教育、社会貢献、スポーツ、国際交流等において、素晴らしい功績を挙げ、社会の発展に寄与しています。今後本学がますます成長を遂げ、国内外から注目を浴びる大学となることを期待しています。

開学当初は2学部5学科だった本学も現在は6学部13学科となり、学生数は約4,500人を超える数になりました。開学当初からの「優れたQOLサポーターの育成」という教育理念は不変です。激動する社会において、本学は不易流行を大切に、教育・研究・社会貢献が融合した「保健・医療・福祉・スポーツ」のオンリーワン大学として成長し続けるでしょう。

この20年間で学科が5学科から13学科に増えたことにより、学生数、教員数、施設が急拡大しました。しかしながら、開学当初からの「優れたQOLサポーターの育成」という教育理念は不変です。激動する社会において、本学は不易流行を大切に、教育・研究・社会貢献が融合した「保健・医療・福祉・スポーツ」のオンリーワン大学として成長し続けるでしょう。

中庭を囲む棟と第一体育館だけだった建物から増築を重ね、県内私大屈指のキャンパスになったことを、南側の長い坂道から一望する度に実感しています。実務経験のある中堅、ベテランとなる卒業生も増えるので、在学生の実習受け入れや職員採用など、後進育成に協力いただく一方、働きながら大学院で学びたい卒業生にリカレント教育の場を提供する機能を、今後は一層高めていけるよう期待しています。

開学当初は5学科で、小さな大学のイメージがありましたが、その後、毎年のように新学科が増設され、今の13学科の大きな総合大学に成長してきました。とにかく勢いのある大学だと感じて、誇りに思っています。新潟の医療・福祉系の総合大学として、学科も更に新設され、益々大きく成長していくものと思います。既設の学科においても、学生・教員ともに益々充実して、学びの母校として、良い人材を輩出していくものと思われまます。

新型コロナウイルス感染症によって 受けた差別について考える



本ゼミでは、現在世界中で大きな問題となっている新型コロナウイルス感染症をテーマとしました。その中でも特に、新型コロナウイルスがもたらす社会問題ともいえる差別問題に焦点をあてました。ゼミメンバーには、新潟薬科大学と、日本歯科大学新潟短期大学の学生、新潟医療福祉大学より3学科の学生、大学院生が集まってくれました。また、協力教員として本学社会福祉学科の五十嵐紀子先生、原口彩子先生にご指導いただきました。

差別問題と専門職連携という、担当教員としてどのようなテーマで取り組めるのかわからない状況で、教員も学生とともに学びながらゼミを進める形になりました。参加学生はそれぞれ個性豊かで、オンラインという状況でありましたが積極的に議論に参加してくれました。進捗状況を確認するたびに深まっている考察に感銘を受けました。差別問題という社会そのものが問題となるようなテーマであり、事例の設定においても私はイメージがつかないところもありましたが、学生達はイメージを膨らまし、それぞれの目指す職種視点から問題を見据えていました。

それぞれの職種の専門性の理解を感染症の差別というテーマからどのように深めることができるのかという点も心配されましたが、議論を深める中で、自らの志す職種のみでは思いもよらなかった視点などを、お互いに関わ

病気に伴う 社会問題と 連携の学び



看護学科
杉本 洋 准教授

本ゼミでは、お互いの専門性を学ぶとともに、専門職が社会を含めた問題の全体像を見据える必要があることを学び、連携それ自体の考察を深め、提言に繋がってくれたと思います。議論には、あがっていたものの、時間の都合上プレゼンテーションに反映されなかった興味深い視点もまだまだありました。今後皆さんには専門職として活躍しながら病気に伴う社会問題と連携について考察を深めていってほしいと思います。

りあう中で学んでいました。私自身話を聞いていて「そんな差別もあるのか」「そんな見方もあるのか」という驚きを感じました。

差別問題を含む病気を取り巻く社会問題に対して、保健医療福祉専門家が今すぐに取り組める何かを提案することは難しいこともあるかもしれません。しかし、学生たちは問題の理解を深めることにも、「医学的専門知識などに加え当事者視点の情報の共有を進め、社会全体の共感を目指す」という、差別問題に向き合うための新たな考え方を提示してくれました。

本ゼミでは、お互いの専門性を学ぶとともに、専門職が社会を含めた問題の全体像を見据える必要があることを学び、連携それ自体の考察を深め、提言に繋がってくれたと思います。議論には、あがっていたものの、時間の都合上プレゼンテーションに反映されなかった興味深い視点もまだまだありました。今後皆さんには専門職として活躍しながら病気に伴う社会問題と連携について考察を深めていってほしいと思います。



オンラインでの「連携総合ゼミ」参加の様子

参加学生のコメント

視機能科学科 阿部 朱里さん

医療職は専門とする領域に関して高度な知識や技術を持っている一方で、その中だけではどうしても思考の偏りが生じてしまいます。本ゼミを通して別の視点からの情報を共有し自分だけでは知り得なかった部分を学ぶことができました。多職種連携は患者様のために行うことはもちろんですが、自己研鑽や社会の変化に繋がると考えられます。就職後、ここでの体験を活かしたいです。

「チーム医療・ケア」を実践的に学ぶ

連携総合ゼミとは

「連携総合ゼミ」とは、本学の特徴的な取り組みの一つである「連携教育」の一環として、4年次前期に開講されるゼミで、これまで学内外で修得した専門知識・技術を総動員し、「チーム医療」を実践的に学んでいきます。

「ゼミ」では、具体的な症例をもとに、関連する学科が混成チームを形成。グループワークを通じて対象者のQOL向上に向けた支援策を意見交換し、検討結果を発表します。本年度の「連携総合ゼミ」では、新潟薬科大学、日本歯科大学新潟短期大学、新潟リハビリテーション大学と、本学が学術提携を結んでいるベトナムのハイズオン医療技術大学、台湾の中山医学大学、フィリピンのアペレス大学、セントトーマス大学の学生もチームの一員として加わり、国際的な視野の拡大など、さらに「チーム医療」の学びの幅が広がりました。

特集2

「連携総合ゼミ」

開催報告

【開催期間】
2021年 8月30日(月)～9月3日(金)

連携総合ゼミの流れ

- ① 担当する専門職を理解
症例に対する支援策について、参考書などを用いながら自己学習を行い、自身が目指す専門職の役割などについて理解・知識を深めます。
- ② 他の専門職を理解
自己学習の成果をグループ内で発表し、各専門職の役割や専門用語などの情報を共有することで、他の専門職への理解を深めます。
- ③ 各専門職の支援策を共有
各専門職の立場から意見や支援策を出し合い、グループ内で支援策の内容を共有することで、他の専門職との連携について理解を深めます。
- ④ 協働して支援プランを作成
グループ内で共有した支援策をもとに、各専門職の立場から意見交換し、対象者に対して最善となる具体的な支援プランを作成します。
- ⑤ グループ発表
これまでの研究成果をグループ内で各自担当して発表会に向けた資料作成を行います。発表会ではパワーポイントを使用して代表者が発表します。



2021年度 連携総合ゼミテーマ一覧

- 脳性まひ(疑い)児と育児不安をもつ母への成長・発達支援
- 中高年者のメタボリックシンドロームの改善
- 「その人の暮らしと生き方に添いたい」糖尿病により足趾切断したAさん
- 児童虐待死事例の検証(報道事例)
- 産声が聴きたい！拳児希望のある不妊症夫婦への支援を考える
- 海外の地域で暮らす障害のある人への多職種連携支援
- 高齢者糖尿病合併症の支援策
- 新型コロナウイルス感染症によって受けた差別について考える
※次ページにて事例紹介
- 統合失調症を発症した長期入院者の退院・地域定着支援を考える
- 高齢者への投薬
- アスリートへの栄養・投薬サポートとドーピング対策
- 聴覚障害のある幼児を持つフィリピン人の母親への支援
- 家族と一緒に暮らしていたい
- チーム間での情報に着目した再発心原性脳塞栓症
- 原子力災害への対応と多職種連携できることは何か?
- 災害時における避難所生活支援・健康管理と私たちができること
- CHARGE症候群の子どもの発達および学習支援
- 骨折入院後に家庭環境が変化した脳性麻痺患者さんの在宅復帰を支援する。対象者との対話を通して

くらしのサイエンス



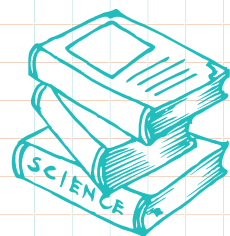
救急救命学科
山内 一 講師

$$S = U \sin^2 \theta = \frac{c^2}{4} 2 \sin \theta \cos \theta$$

テーマ

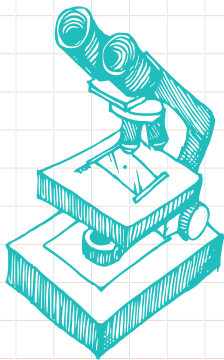
こんな時どうする!?

応急手当を学ぼう



備えあれば憂いなし

子どもの頃、空き地で野球、雑木林で秘密基地ごっこ、近くの川で魚釣り……とにかく日が暮れるまで外で遊び、いつもどこかにちょっとしたケガがあったものです。今は環境も大きく変わり、そんな姿は少なくなつたように思います。予防という観点では危険を排除することが重要であり、子どもだけで危ない環境に行かせないことや遊び道具を管理することは良いことだと思いますが、その反面子どもはたくましく育ちにくい時代でもあると感じています。そんな時代背景が関係しているのか定かではありませんが、さすがに救急車で病院に行くほどのことではないようなことで救急外来を受診する光景をよく目にしました。自分で判断できない場合は、迷わず救急車を呼ぶことや病院で受診するようにしていただきたいのですが、自分でもできる応急手当も覚えておくことも大切なことだと考えています。

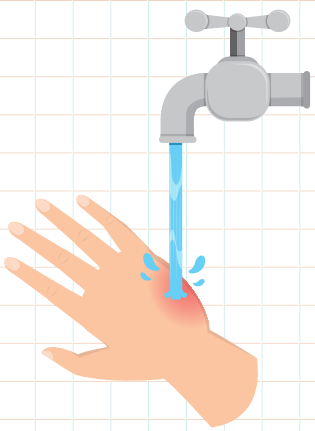


【擦過傷】

転んだ時などにできるいわゆる「すり傷」です。傷は深くないため出血量も少ないことがほとんどです。その割にはひりつく痛みがあります。一番の問題は傷口についた泥や砂などの異物です。放置しておくとなじみ傷痕が残ることもあります。

〜対処法〜

まず水道水できれいに洗ってください。目に見える異物を取り除くことはもちろんですが、非常に小さな異物が傷口に入り込んでいるので、使い捨ての歯ブラシなどで傷口を洗うことも有効です(ちょっと痛いですが)。十分に洗ったら市販の被覆剤を貼るだけです。傷口からは治癒を促すための体液が出てきて自然に治ります。ただし、傷が大きい場合は処置の苦痛も大きいので受診したほうが良いです。また、顔面にできた場合は美容的にも受診(形成外科)することをお勧めします。

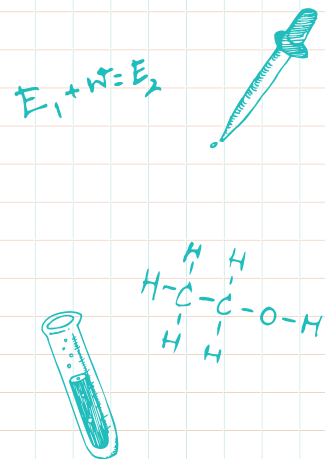


【熱傷】

「やけど」のことです。料理中に油や熱湯などで受傷したことがある方は多いのではないのでしょうか。また、コタツや湯タンポなどで受傷することもあります。熱が原因ですが、時間が経つと損傷の程度が進むことがあります。4段階に分けられていて、Ⅰ度は受傷部位が赤くなり、浅達性Ⅱ度は痛みが鈍くなり、Ⅲ度では損傷が神経にまで達して痛みを感じません。

〜対処法〜

すぐに流水で受傷部位を冷やしてください。熱による損傷の程度を抑え痛みも和らぎます。範囲が狭く赤くなっている程度であれば市販の被覆剤を貼り、範囲が広い、傷口が白っぽい、知覚鈍麻または痛みが激しいなどの場合はすぐに受診してください(その間も冷やします)。



【119番通報】

自分では判断がつかないことが起きたら躊躇せず救急車を呼びましょう。119番通報するとまず

- ①「火事ですか? 救急ですか?」と聞かれるので「救急車をお願いします」と伝えてください。続いて
- ②「現在位置を教えてください」と聞かれるので自宅にいるならば住所、自宅ではない時は分かりやすい目標物を伝えてください。この時点で救急車は出動します。
- ③あとは状況を落ち着いて説明しましょう。

自分でできることを増やしておくこと、いざという時に素早く対応できる可能性が高くなります。

〜備えあれば憂いなし〜





参加学生 健康栄養学科 4年生/鈴木渉太さん
3年生/佐藤日彩さん、佐藤寧々さん、清水瑠羅さん、見海綾さん



「あったかおうちごはん」の活動概要について

新潟市食と花の推進課の事業への協力として、普段あまり料理をしない学生でも簡単に作れるレシピを考案し、レシピ集を作成しました。この活動の目的は食への関心、主食・主菜・副菜を揃えた食事、朝食欠食をしないことに対する意識を高めてもらうことです。コロナ禍ということもあり、直接会って話し合うことはできませんでしたが、Zoomを使用した話し合いやメールでのやり取りを通して、

活動を通して感じたこと

誰に向けたレシピで何を目的とするのか? 工夫したら手軽に作れるレシピになるのかなど様々なことを考え、相手の立場に立つて考えることの大切さを学びました。普段料理をしない学生や料理が得意ではなく何をしたらよいか分からないなどの悩みを持つ学生から率直な意見をいただいた際には、自分たちが当たり前だと思っていることが当たり前ではないと感銘しました。インスタグラム投稿キャンペーンでは、なかなか投稿数が増えませんでした。活動を普及することや実際にレシピ集を手に取り調理をしてみようということ、その感想を聞くことの難しさも感じました。一方で、話し合いをしてみようという気持ちになりました。また、様々なアイデアを出し合い、活動を普及するための工夫をしたことも良い経験となりました。今回学んだことを今後の活動や将来に活かしていければと思います。



鈴木一恵 准教授

今年1月、新潟市食と花の推進課から、「レシピ作成参加学生募集」の案内があり、当学科の学生5人が自主的に参加しました。春休みにレシピづくり、7月に学内でのレシピ配布、さらに8月には独自にレシピ動画の撮影も行い、現在は編集作業中です。この間、学生が自ら(仲間と)考え、提案、行動する姿を間近で見て、食を通じて人の役に立ちたいという学生の思いに触れ、とても頼もしく感じました。今後はレシピ動画10品を公開し、学内での普及活動に加えて、広く住民の方々にも発信したいと張り切っています。これからも地域の健康づくりを食の面から支える活動に、学生が積極的に参加できるよう応援したいと思います。



作り方の動画は
コチラ

主菜レシピ



お湯ポチャ! バンバンジー

調理時間 約35分 1食あたりの材料費 約120円

- 材料(2人分)
- 鶏むね肉...1/2枚
 - トマト...1個
 - きゅうり...1/2本
 - ごま油...大さじ1
 - しょうゆ...小さじ2
 - 酢...大さじ1
 - 味噌...小さじ1
 - 砂糖...大さじ1強

- 作り方
- 鍋にたっぷりのお湯を沸かし鶏肉を入れる。
 - 再沸騰させ、火を止め、蓋をして30分以上置いておく。
 - 取り出して食べやすい大きさに切る。
 - トマトはスライス、きゅうりは千切りにする。
 - Aを混ぜ合わせてタレを作る。
 - 野菜→鶏肉→タレの順番で盛り付ける。

ポイント

- タレはお好きな市販のドレッシングでも代用OK!
- ゆっくり火を通すのでしっとりとした鶏肉に!
- 手作りサラダチキンとしてもおすすめです!

第21回

新潟医療福祉学会
学術集会 ― 開催報告 ―

チーム医療・多職種連携に
求められる人材育成と医工連携

テーマ

2021年10月30日(土)に「第21回新潟医療福祉学会学術集会」が開催されました。昨年度に引き続き、新型コロナウイルスに対する感染防止の観点から、学術集会オリジナルサイトを活用したWEB開催といたしました。メインテーマを「チーム医療・多職種連携に求められる人材育成と医工連携」とし、このメインテーマに即した特別講演とシンポジウムを、同時双方向のウェビナー形式で配信しました。354名の方に参加登録いただき、特別講演およびシンポジウムは200名近い参加がありました。また、一般演題には過去最多の126演題の応募があり、これらは抄録集上で発表をさせていただきました。一般演題を登録してくださった先生方に感謝申し上げます。なお、これら一般演題の中から会頭賞1名、奨励賞5名を選出し、表彰を行いました。

特別講演

「医工連携とリハビリテーション」
座長 大西 秀明「新潟医療福祉大学リハビリテーション学
部 部長 教授」
講師 出江 紳「東北大学大学院
医学研究科リハビリテ
ーション医学分野 教授」

本講演では、最初に機器開発に至る関連研究を紹介いただきました。次に、現場ニーズに基づく機器を開発し医療機器として上市した後もチームを発展させてきたプロセス、および多職種協働で患者経験価値の向上に取り組む意義を解説いただきました。さらに、現在医工連携で取り組んでいる「障害者の支援機器開発に携わる医療・福祉・工学分野の人材育成モデル構築に資する研究(厚生労働科学研究費補助金による)の概要と成果の一部を紹介いただきました。

シンポジウム

「医療・福祉・工学分野における学際的な人材育成モデルの構築に向けて」
(厚生労働科学研究費・障害者政策総合研究事業との共催)
座長 樽 淳裕「新潟医療福祉大学理学療法学科
教授」
須田 裕紀「新潟医療福祉大学義肢装具
自立支援学科 講師」
演者 原 陽介「株式会社「EPOD」代表取締役」
井上 剛伸「国立障害者リハビリテーション
センター福祉機器開発部 研究部長」
浅川 育世「茨城県立医療大学 教授、附属
病院リハビリテーション部長」

指定発言

田上 未来「厚生労働省 福祉工学専門官」
シンポジウムでは、現在進められている事業の中心的立場の先生方から、「パイオデザインによる機器開発と人材育成」、「支援機器開発にかかわる人材育成モデル」工学研究者の立場から、「医療・福祉・工学分野における学際的な人材育成モデルの構築に向けて」理学療法士養成施設教員の立場から、「として」講演いただきました。各講演後には、指定発言の先生からのコメントがあり、学際的な人材育成モデルの構築についての議論が行われました。



会頭賞および奨励賞受賞者



表彰式の様子

広告・寄付企業は37社にのぼり、多くの企業の皆様よりご支援をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。次回の第22回新潟医療福祉学会学術集会は、2022年10月に開催される予定です。来年度も多数のご参加をお待ちしております。第21回新潟医療福祉学会学術集会 実行委員長 樽 淳裕(理学療法学科)

リハビリテーション科学とスポーツ科学の融合による先端的研究拠点

— Sports & Health for All in Niigata —

渡邊 拓さん(博士後期課程 医療福祉学専攻1年)の研究論文が、国際誌『Cerebral Cortex』に掲載されました！

Voxel-Based Morphometry (VBM)は、磁気共鳴画像診断装置(MRI)を用いて撮像されたT1強調脳画像の信号強度をもとに、ヒトの脳構造を灰白質・白質・脳脊髄液に区分し、それぞれの容積を算出することが可能な脳構造画像解析手法です。このVBMは同一被験者に対して縦断的に用いることで脳灰白質容積の可塑性の変化を検討することが可能であり、多くの先行研究にて一般的に用いられている手法ですが、ヒトの脳灰白質容積がどの程度変動するのかという基礎的な知見が欠けていました。

そこで本研究では、若年健康成人における短期間の脳灰白質容積の変動性を検討するとともに、変動性に寄与すると予想される因子性別および脳由来神経栄養因子(BDNF)遺伝子

多型が脳灰白質容積の変動性に及ぼす影響を検討しました。その結果、ほとんどの脳領域(全47領域中46領域)において脳灰白質容積変動性は小さいことが明らかとなりました(OCC V/OCC)。さらには、女性でBDNF遺伝子多型がVBM型の人々の脳灰白質容積変動性はわずかに高い傾向がありました。以上の結果から、ヒトの脳灰白質容積変動性は小さく安定していますが、性別とBDNF遺伝子多型の影響を受けることが明らかとなりました。

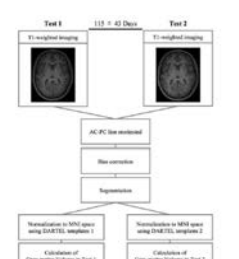
【本研究成果のポイント】
対象は若年健康成人41名とし、約4か月(平均値±標準偏差:14.5±42.8日)の間隔を空けてT1強調脳画像を縦断的に撮像した。脳灰白質容積の算出にはVBM法を用い、それぞれの総灰白質容積、総白質容積、脳脊髄液容積、47領域の局所脳灰白質容積を算出した。脳灰白質容積の変動性の指標には級内相関係数(ICC)およびTest-retest



博士後期課程 医療福祉学専攻1年 渡邊 拓

reliability (%TRV)を用いた。VBMを用いた脳構造画像解析は比較的に簡単にヒトの脳構造を定量的に評価できるところから多くの先行研究で用いられています。本研究結果は、このVBMの信頼性を裏付ける基礎的な知見として重要であると考えています。

【渡邊さんからのコメント】
VBMを用いた脳構造画像解析は比較的に簡単にヒトの脳構造を定量的に評価できるところから多くの先行研究で用いられています。本研究結果は、このVBMの信頼性を裏付ける基礎的な知見として重要であると考えています。



理学療法学科 平林 怜 助教

理学療法学科 平林 怜 助教らの研究が国際誌『Sports Health』に掲載されました！

咬合はあらゆる身体活動の場面で、日常生活では咀嚼・精神状態によっても咬合に大きな影響を受けています。噛みしめることで歯根膜の受容体から上肢・体幹・下肢に遠隔促進効果が働くことが知られています。

そこで本研究では、脊髄機能の変調、関節運動をした際の筋力や筋電図解析を用いて咬合強度によってもたらされる効果を検討しました。その結果、高強度の咬合は、脊髄の興奮性が増大し、脊髄相対性抑制が消失し、同時収縮指数が高くなることから、関節の固定に特

化した運動パフォーマンス(ウエイトリフティング、コンタクトスポーツ、器械体操の吊り輪など)に良い効果をもたらす可能性を明らかにしました。また、低強度の咬合は、脊髄の興奮性が増大し、脊髄相対性抑制が残存し、同時収縮指数が減少することから、関節運動に特化した運動パフォーマンス(野球、テニスなど)に良い効果をもたらす可能性を明らかにしました。

【平林先生からのコメント】
咬合は良い効果だけでなく悪い影響を与えてしまうこともあります。実は歯が噛み合わせられている時間は、24時間の中でたった17分半といわれており、ほとんどの時間が上下の歯は

接触していません。つまり、日常生活で過剰に咬合をすると全身の筋肉が緊張状態となり、腰痛や肩こりや頭痛など身体に様々な悪影響を及ぼします。また、噛み合わせも日常生活から運動と密接な関係があります。今後、咬合度合い、噛み合わせが運動パフォーマンスに及ぼす影響を明らかにして、スポーツ選手の運動パフォーマンスを向上させる一助となるよう研究を進めていきたいと思います。

「こわがらなくてもだいじょうぶよ
ではおめめ の検査をしましょう」



近視予防のための子ども向けオンライン教材を制作
今年度から小中学生に1人1台のタブレットなどの端末が配備され、格的に教育のデジタル化が進む中で、子どもたちの視力への影響はさらに問題視されています。文部科学省は公益財団法人日本眼科医会の協力のもと、2021年5月～6月に、全国の小学1年生～中学3年生計9,000人を対象に近視の進行状況を把握する初の大規模調査を実施し、有効な対策を検討するとしており、眼の健康を守るための教育「眼育(めいく)」は重要性を増しています。

そこで、視機能科学科の石井 雅子 教授ゼミの所属学生たちは、コロナ禍でも時間や場所を問わずに、「眼育めいく」を行うことができよう、近視予防のための子ども向けオンライン教材を制作しました。このオンライン教材は、大画面スクリーンやモニターに映し出します。子どもと対話し、眼や身体を動かしながら講習を進めます。今後もこの活動を通して、「子ども眼の健康」に関する保健指導を実施していきたいと考えています。

SHAINプロジェクトとは 文部科学省 平成29年度 私立大学研究ブランディング事業の選定プロジェクトの通称。リハビリテーション科学とスポーツ科学の融合により「Sports & Health for All in Niigata (SHAIN)」=地域住民からアスリートまですべての人が安全にスポーツを楽しみ、幸せな生涯を過ごす新潟県」の創出を目指します。

CAMPUS NEWS

キャンパスニュース

ホットで旬なニュースをお届け!



【硬式野球部】
2021年プロ野球ドラフト会議にて桐敷 拓馬選手が阪神タイガースより3位指名、佐藤 琢磨選手が福岡ソフトバンクホークスより育成13位指名！

10月11日(月)に開催された2021年プロ野球ドラフト会議にて、本学硬式野球部の桐敷 拓馬選手(健康スポーツ学科4年・本庄東高校出身、写真上)が阪神タイガースより3位で、佐藤 琢磨選手(健康スポーツ学科4年・新潟青陵高校出身、写真下)が福岡ソフトバンクホークスより育成13位で指名されました。指名を受けた後、記者会見が行われ、桐敷選手「ここからもうスタートしている。体や打球をワンランク上げたい。既にプロで活躍している本学卒業生の笠原 祥太郎 投手(中日ドラゴンズ)や漆原 大晟 投手(オリックス・バファローズ)の打球を見て、自分たちも「頑張らない」と思えたように、後輩にエールを送れる選手になればと思う」と、それぞれ指名された喜びや入団に向けての意気込みを述べました。

【言語聴覚学科】
田村 俊暁 助教らの共同研究の成果が日本音声言語医学会発行の査読付き学術雑誌に掲載されました

近年、科学技術の発展に伴い、音響分析(声を物理現象として分析する方法)は以前に比べて導入にかかるコストが激減しています。この音響分析で、神経や筋の病変や損傷に伴って起きる発声発語障害のある方の発声状態、特に「母音」部分に焦点を当てて調べました。すると、ペタランの言語聴覚士が評価した聴覚的印象の重症度と類似した音響学的測定結果が得られることがわかりました。

この研究は、まだデータの数が少なく、分析する音声の録音の仕方など定番がない状態で、実際のリ



言語聴覚学科 田村 俊暁 助教

【作業療法学科】
能登 真一 教授らの研究論文が国際誌『International Journal of Environmental Research and Public Health』に掲載されました

この研究は、一般住民の生活習慣と健康関連QOLの関連を調べた上で、影響を与えている因子をもとに、microsimulationという手法で質を調整した生存年(Quality-Adjusted Life Years, QALYs)を推定したものです。

活動的に過ごし、良質な睡眠を取っている人はそうでない人に比べて、3.6QALYs(何年後であっても、完全に健康な状態で3.6年過ごせるということ)を余分に獲得できるという結果になりました。

本研究の結果は、健康維持プログラムの必要性とそれについての費用対効果を議論する際に有用になると考えています。



【同窓会】
在学生PCR検査費用寄付金目録贈呈式が執り行われました

2021年10月4日(月)、新潟医療福祉大学長室にて「在学生PCR検査費用寄付金目録贈呈式」が執り行われました。

新潟医療福祉大学同窓会総会にて、在学生1人につき1回分の検査費用を寄付することが決定し、同窓会 齊藤 公二 会長より 西澤 正豊 学長へ、寄付金目録を贈呈いたしました。

今回の寄付金が、在学生の学生生活の支援に繋がれば幸いです。

ハビリテーションへの応用までには課題がたくさんあります。ただし、今回得られた成果によって聴覚印象による評価で臨床家ごとに差が出てしまうことを軽減できる可能性を見出しました。

今後は分析する課題や測定方法の精度を上げて実際の現場に落とし込めることを目指しています。



言語聴覚学科 田村 俊暁 助教